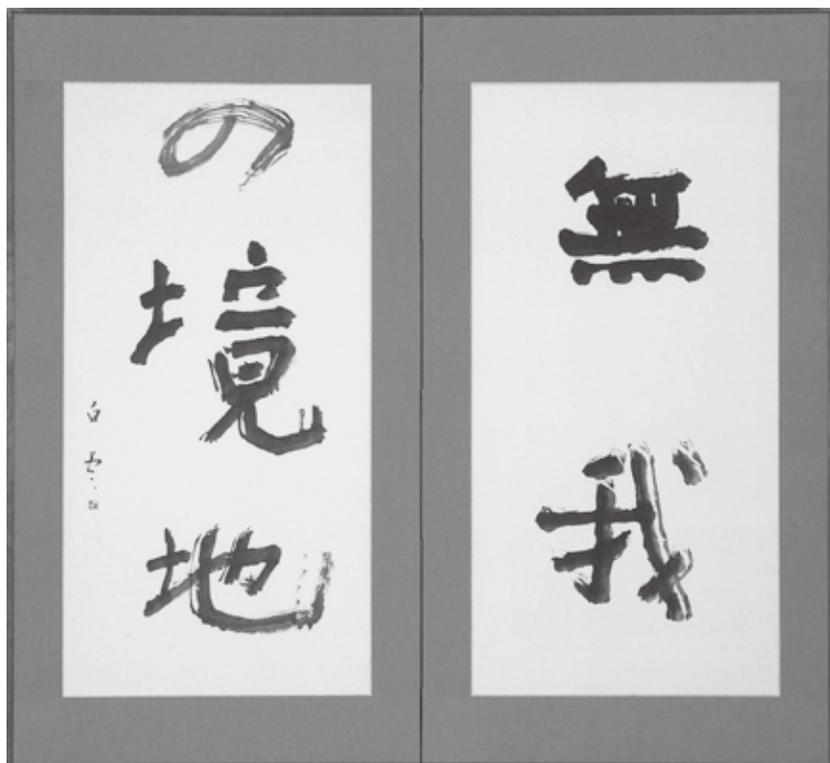


川崎白雲作品集

より

(31)

60. 「無我の境地」



(135×70)×2



川崎 白雲 先生

白雲先生と共に(1)

恩地 春洋

昭和二十年、敗戦の年、大阪から高知師範に迎えられた先生に、小高坂のバラック校舎で鈴木翠軒先生の書法を教えて頂いたのが最初の出会いでした。黒板の左から右へ筆を倒したままスワットと水書きをして「書はこんなに書くもんじゃ」と、私たち学生の度肝を抜いたことでした。高知師範は、川谷横雲先生研究の貫名崧翁の強く厳しい書法の指導が徹底し全県下に広がり、高知師範卒業の先生の板書は、どなたも見事なものでした。そこへ近代的な感覚の翠軒流を紹介したものですから、ちようと、雪舟の絵の後、応挙の絵を見るようなもので、革命的な驚きでありました。

三年間、授業と書道部で指導頂きました。その活動は積極的で、県内で初めての硬筆展や、校外の習字指導に市内はもとより、夏休みには地方にまで出かけました。学生時代に書道芸術院展に出品したり、私達は、すっかり梅村信者になりました。

卒業して二年、高知県の山の学校で勤務、昭和二十六年、突然「大阪に行かないか」とお誘いを受け、岡田米峰、小島白洲君と三名が上阪しました。まったくの田舎者で、親戚も知人もなく、ただ、先生のお伴をして大阪に出ました。大阪には多田観山・小伏竹村・山下皓映(笠雪)・竹端桐村など、池田師範で教えた人たちが、川崎先生の後を継いで活躍中の中川雨亭・水嶋山耀(鶴山)・中西淀蘭・藤井青蘭・喜多松琴先生と出会いました。同期の谷脇梅翠君は高知に残り、木原江村君は東京に出ました。

郷里鏡村で、道元に心酔しておられた頃の先生が、ある日朝まだ明けぬ裏山に登って満天の星を仰ぎ、高知市内の生活の灯を眺めながら人生について考えておられた頃を想像している。

川崎白雲作品集

より

(32)



川崎 白雲 先生

白雲先生と共に(2)

恩地 春洋

59. 「村民一丸」



故郷 鏡村へ (現高知県)

35□135

58. 「知足」



35□67

(番号は作品番号)

私たちは、当時大阪市の指導主事関岡松嶺先生のお世話で学校に勤務しながら書の勉強をしました。昭和三十年代、戦後の混乱の中で、社会は大揺れに揺れる中、勤評闘争があり左翼思想、若い私たちはデモや集会に加わり、社会主義に走りました。「平和」と三人で合作したり左翼詩人の詩を書いたりしたのもその頃の事でした。三人申し合わせて造反、書をやめたこともありましたが、もつともリーダー的存在であった岡田君は、筆も硯も全部人にやっってしまったました。親代わりの川崎先生や美代子奥さんにご心配をおかけしたことだろうと思います。「何のために大阪に来たのだろうか?」と気づいた私たちは一年で書に復帰しました。この間、ひたすら書の学習に専念していたのは泉 雪華・和田清香・日野藤華の三人娘と消防署組の高橋石洞・佐藤雲溪さんなどでした。

この造反を機に厳しかった先生が急にやさしく言葉をかけてくれるようになりました。美代子奥様の助言だったかも知れません。

梅村先生は烈しい気性の先生で、何事にも情熱的で、積極的で計画的でした。自分にも門人にも厳しい先生でした。

川崎白雲作品集

より

(33)



川崎 白雲 先生

白雲先生と共に(3)

恩地 春洋

57. 「聖の道を一人で」



135□35

62. 「白雲」



135□35

印 「風狂白雲」

(番号は作品番号)

高知市の高野寺には川谷横雲先生の胸像がありますが、横雲先生が亡くなられたあと何ヶ月か仕事を中断して帰省し、県下を廻って募金に奔走、神戸在住の彫刻家に依頼して制作されたものです。

【版文伊藤渡（神谷）先生は、梅村先生が付属小で教えられた師範学校の後輩です】梅村先生の師を想う心、子弟の絆の強さを教えられました。

京都駅のモールギャラリーで書展をしたときは、締切に遅れたものは展示を許しませんでした。京都まで作品を持って行って、持って帰った人もありました。妥協を許さぬ厳としたきびしい処がありました。

毎日展審査には、先生の意見も通らない時もしばしば、何しろ、手島右卿・松井如流・町春草先生などでしたから。ある年、「審査が気に入らん、来年から恩地、もうこんぞ。」

翌年退会、村上三島先生が私を審査会員に推挙してくれたことでした。

川崎白雲作品集
より
(34)



川崎 白雲 先生

61. 「先賢恩情」



135×35

63. 「大器晩成」



135×35

八十九 白雲

(番号は作品番号)

白雲先生と共に(4)

恩地 春洋

戦後の書の海外交流の草分けは、梅村先生です。イーデスハンソンさんとアメリカを三か月も廻って、日本の書を紹介されました。この記録は「ブラシの詩人」として出版されました。「この書を薦めくれし門人の恩地春洋君におくる」とサイン入りの本を大切にしています。アメリカから帰った先生は、赤シャツを着てトルコ石の青い指輪をし、服装も、書もすっかりおしゃれになっていました。世界の中の書を発見し、今までの書の制約に捉われず、自由で、独創的な書を次々に発表されてすっかり詩人になっていました。「新書芸」と名付けて、ゼラチンの効果をねらったり、濃淡の墨を混ぜたり、皿の底を使って書いてみせたりしました。ある時、キャバレーの壁書を揮毫、お酒の飲めない先生が、クラブの会員になったりしたこともありました。

川崎白雲作品集

より

(35)

64. 「共に楽しく」



69□237

88. 「塩となる」



48□170



川崎 白雲 先生

白雲先生と共に(5)

恩地 春洋

筆先を自分の書きやすいように、ねらいに添って切り整えたり、後には「右手はうまく書きすぎるから」と左手で書いたり、左手で逆書きを試みたり、研究心強く、それも徹底していました。「九成宮」や「孟法師碑」の徹底臨書のあとが、今もギャラリ―白雲に残されています。

門人、小島白洲・小伏竹村・山下皓映に私の四人がお供して、東京や鎌倉に手島右卿先生の書論、書話をお聞きする会を計画して下さったことがあります。中国書道史、日本の書道史、現代の書話、書論など至福の時間をいただきました。出版のために先生が自らテープをおこし、原稿を二百枚くらいにまとめられました。原稿を私が預かり、手島先生のお目通しをお願いしましたが、残念ながら、鎌倉へ転居の際、行方不明になったということでした。この原稿のダイジェスト版を「学書指針」と名付けて門人のためにまとめてくださいました。(これは「右卿全集」の中に資料としておさめられています)

(番号は作品番号)

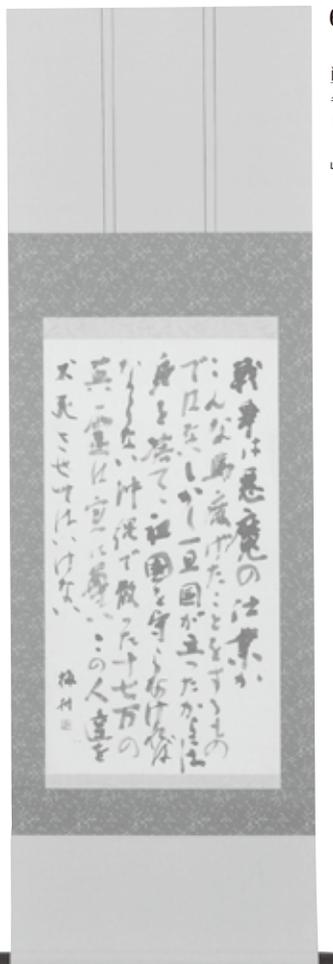
川崎白雲作品集

より
(36)



川崎 白雲 先生

68. 「戦争は…」



印 梅村 150□49

72. 「家」 和気あいあい



印 梅村 87□90

戦争は悪魔の仕業か
こんな馬鹿げたことをするもの
ではない。しかし一旦国が立ったからには
身を捨て、祖国を守らなければ
ならない。沖繩で散った十七万の
英霊は実に尊い。この人達を
犬死させてはいけない
梅村

白雲先生と共に(6)

恩地 春洋

「花見をするから来い」と呼ばれて、大阪平野を一望の信貴山荘で梅村社幹部が集まり一杯飲んで語りあつたことがあります。私が芸術院の沖繩訪問から帰国したら、先生は旅に出て行方知れず、門人一同、途方にくれていました。花見は別れの宴であつたのです。出奔の理由は未だに聞いておりませんが、そのまま順調に大阪に居られたら、今頃は、書道界のドンになつていた筈だったので…。旅に出られて十年、先生は自らの「学書の時期」として全国を転々としたから「徹底臨書」に打ち込まれました。ずっと付き添つて墨擦り役に徹した美代子奥さんの助けなくしては出来ないこと、美しい夫唱婦隨の姿を思い浮かべます。その時々々の学書過程は、門人たちに送つて下さいました。「旅先にて、白雲」これが封書の裏書でした。

(番号は作品番号)